新編 西鄉隆盛

第三卷

林房雄

林　房雄著

新編　西郷隆盛

第三卷

月魄の卷
彗星の卷

創元社

新編 西郷隆盛 第三卷

定價 二三〇圓
地方定價 二三五圓

昭和二十七年八月二十五日 初版印刷
昭和二十七年八月三十日 初版發行

著者 林房雄
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四

發行者 小林茂
東京都中央區入舟町二ノ二

印刷者 永井直保
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
(大阪市北區桶上町四五)

發行所 株式會社 創元社
電話芳場町(66)二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

(本製木鈴・刷印井永)

萬一落丁乱丁本がありましたら取替へます

檢印廢止

月魄の巻

第一章　白鶴城……二
第二章　芋の弟子……一六
第三章　南の秋……三三
第四章　道中記……四三
第五章　風と雲……五六
第六章　あの道この道……七一
第七章　羅紗羽織……八六
第八章　採薪亭……九八
第九章　山紫水明……一〇八
第十章　雨……一二六

彗星の巻

第一章　水の上……一四三
第二章　赤鬼……一五〇
第三章　夕霧……一六八
第四章　妖虎……一七九
第五章　走馬燈……一九三
第六章　秋風抄……二〇九
第七章　彗星……二二六
第八章　獵人……二三四
第九章　浮草……二三四
第十章　都日記……二四一
第十一章　落日……二五三

月魄の卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　白鶴城

太鼓が鳴る。フランス流の軍鼓のひゞきである。

その音に合せて、翅の赤い甲蟲が城壁の上の若芽のまはりを踊りまはる。陽に蒸された楠の若葉が樟腦の匂ひを空氣の中に撒き散らす。銃劍がきらめき、小旗がひるがへる。丸に十字の紋章の下に綠色を染め出した小隊旗である。軍鼓のひゞき、舞ひ上る土煙。……動かぬものはたゞ天守閣の彼方の固い夏雲ばかり。鹿兒島、白鶴城。二の丸外御庭では、今日も少年隊の調練であつた。

八九歳から十二三歳までの稚兒組は木銃を肩にし、十七八歳までの二才組は本物のゲーベル銃をかついでゐる。紺絣の筒袖に裁着袴、頭には白鉢卷、足には脚絆に草鞋がけ。總勢およそ百名、卽ち二個小隊調練である。數の少ないわけは、今日は君側に侍する御小姓並びに門地家柄の高い少年子弟だけの特別訓練であるからだ。それだけに服裝も整ひ、眉目の秀でた美少年が多く、眺める眼には、可憐であるばかりでなく一種艶冶な趣きさへある。

島津の定紋のついた綠色の打裂羽織を着た少年が指揮役であつた。彼の額の白鉢卷には、じつとりと汗がにぢんでゐた。照りつける六月の日射しのせゐばかりではなかつた。庭內のお茶屋に幔幕を張り、その下に机を据ゑ、左右に軍賦役を從へて、じつと隊伍の操練を眺めてゐる藩公齊彬の眼が怖ろしかつたからだ。

藩主の留守中に軍役總監督に任じられてゐた島津久光もさつきまで齊彬のそばにゐた。彼は軍賦總奉行の島津久徵が何か部厚な書類を持つて來たのをしほに、座をはづしたが、齊彬はその書類を机の上にひろげ、侍臣のさゝげる硯箱を引きよせて、何かしきりに書込みをはじめた。だが、ときどき顏をあげては少年隊の方を眺める眼の色は、油斷のならない鋭さであつた。少くとも指揮役の少年にはさう感じられた。

しかし、隊伍の少年たちは閱兵中の藩公が途中から書き物をはじめたことに氣がついて、張合ひがぬけたのか安心したのか、步調の亂れが急に眼立ちはじめた。

「組々右へ、四列縱隊作れ！」
指揮役の少年が叫ぶ。第二小隊の先頭が、この號令を取りちがへて左にまがらうとしたので、隊伍の中央が混亂しざわめきと笑ひ聲が起つた。
「何事だ、何といふ態だ」突如として激しい怒聲が庭中にひゞきわたつた。「全隊、その場に止れ！　こつちを向いて二列横隊、何をぐづぐづしてをるかッ！」
西洋馬術用の鞭をつかんで御茶屋から飛び出して來たのは、意外にも齊彬自身であつた。弱さうな身體のどこからこんな聲が出たかと思へるほどの大聲であつた。
「號令を聞きちがへた者は誰だ。出て來い、三歩前へ！」
脊の高い十四五歳の少年が笹の葉のやうに蒼ざめて、三歩進み出た。
「まだある。まだ三人あるぞッ！」齊彬は鞭をあげて空中でヒユウと鳴らし、「余の眼をたぶらかすつもりか、卑怯者奴が！」

＊

隊列のあちこちから、木銃やゲーベル銃をさげた少年たちがばらばらと進み出た。三人だけではなかつた。數へてみると、殆んど十人近かつた。どれも眉根を眞蒼にし、唇をふるはせてゐる。號令を聞きちがへなかつたものまで混つてゐるにちがひない。少年たちは嚴樣の怒聲に膽を消して、催眠術にかゝつたのか。
齊彬の頰には微笑の影が浮んだ。だが、言葉は激しく、
「大勢だな。心のゆるんでゐる證據だ。……これが實戰であつたら、どうなる？　右へ進めと言はれて左に行つたら敵に背後を見せることになり、卽ち勝ち戰も負け戰となる。子供だからと言つて許すことのできぬ重大な過失だ。解つたか。――解つたなら、よし、列に歸れ！」
救はれた罪人のやうに、少年たちは隊列に復する。
齊彬は鞭を振りながら、なほつゞけた。
「皆のもの、よく聞け。其方等は余の側近に侍し、門地家柄も高く、卽ち全藩の模範とならねばならぬ少年隊だ。……少年隊は城下のすべての方隅にある。毎日、午後から日暮れまでひゞきつゞける太鼓の音をお前らは聞いてゐるだらう。彼らはいづれも負けず劣らず訓練にはげんでゐるのだ。……油斷をすれば、お前たちは貧乏な足輕の子供にも負けるぞ。西洋の銃砲彈は、門地家柄などに遠慮はせぬ。默つて飛んで來て、默つてお前らの胸板を撃ち拔くばかりだ。……見よ、我が白鶴城は海に近い。一たび開戰の曉には、西洋諸國の軍艦は海を傳つて直ちに城下に迫る。櫻島を占領して砲門を開けば、半刻たゝぬ間に、この城は木つ葉微塵となるかもしれぬ。」
息を殺して少年たちは聞き入つてゐる。咳の音一つ聞え

ず、たゞ蟬の聲だけがしみ入るやうに高い。

「錦江灣上に黑船の現はれる日は決して遠くない。西洋諸國は虎視眈々として日本を狙つてゐる。開戰の曉には、日本の南端である我が薩摩が眞先に狙はれるものと覺悟しなければならぬ。……その時の用意を今から行ふ。それが其方等の毎日の調練の目的だ。我が城が木つ葉微塵にされる前に、敵の艦隊を木つ葉微塵に叩きつぶす。……余が先刻から机の上にひろげてゐる書類を何と思ふか。櫻島砲臺の設計圖だ。錦江灣防備要塞の築造書だ。……天保山、大門口、辨天波止場、祇園洲の砲臺だけでは足りない。櫻島に少くとも三ヶ所の大砲臺を築き、敵艦隊が鹿兒島の正面に侵入することを絶對に防がなければならぬ。」

御側役の堅山武兵衞があわたゞしい足どりで近づいて來て、

「殿、おそれながらしばらく……」

と言つた。何か重大な用件らしかつたが、齊彬は鞭をあげて、待てと合圖し、訓辭をつゞけた。

「だが、武器よりも人だ。砲臺が錦江灣を取卷いて萬里の長城の如く並び、幾萬挺の元込銃が武器庫に充ちても、これを扱ふ人の魂がなまくらでは何もならぬ。特に上に立つ者の精神が鍛錬されてゐなければ全藩の志氣は沮喪してしまふ。……假りに今、城中のこの庭に黑船の砲彈が飛んで來たとして、藩主たる余が眞先に逃げ出したなら、其方等はとても踏み止つて戰ふ氣にはなれまい。」

＊

齊彬の訓辭は縷々としてつゞく。相手が前髮姿の少年と稚兒であることを忘れたかのやうである。

「もう一度くりかへす、お前らは余の近侍であり、名門の子弟である。一朝事あるときには、余と共に彈丸雨飛する中に最後まで踏みとゞまり全藩の志氣の中心にならなければならないのだ。お前らは城下の武士小路の子供たちを、貧乏人扱ひにして輕蔑してゐるかもしれないが、彼らはお前らよりも十倍も熱心に調練にはげんでゐるぞ。一昨日は下加治屋町方限の少年隊を檢閲したが、號令を聞きちがへるものは勿論、足を踏みちがへるものさへ一人としてなかつた。……日頃の心掛けが大切だ。調練は常に實戰と思へ。……お前らの祖先は豐臣秀吉にさへ負けなかつた。朝鮮征伐でも、關ヶ原でも他藩を驚かす手柄を立てた。祖先の名を恥づかしめてはならぬ。解つたか、解つたものは左手を擧げい。」

紺絣の筒袖が一齊にあがる。

「よし、調練始めッ！」

太鼓が鳴り、旗がひるがへり、石のやうに固く緊張した少年隊の行進が始まつた。

「殿、そこは日向でございます。木蔭におはいりになつては……」
と、堅山武兵衞が言ふ、齊彬は額に夏の日の直射を受けたまゝ振りかへらず、
「お前の用件といふのは、そのことか。」
「いえ、江戸表より急飛脚がたゞ今到着……」
「江戸から？」
と初めて振りかへつた。
「御老中阿部伊勢守殿御逝去。」
「なにッ、阿部が？……いつ、いつの話だ？」
「はつ、去る六月十七日のこととか……詳しくは留守居役よりの書面にございます。」
齊彬の手から、はらりと鞭が地に落ちた。
阿部正弘の健康すぐれず、登城もとかく怠りがちといふ話は、松平慶永の最近の手紙の中にあつた。
「顏色憔悴、昔日の面影なし。この夏の暑さに堪ふべくや否や。……今にして彼を失はんか、天下の形勢は推移豫想すべからず、公私ともに憂ふべき限りに御座候。」
正弘は內外の政狀に絕望し、終日酒をあふり、登城前にさへ二升近くの朝酒を飲み、十五歲の少女を溺愛して放恣亂淫、自ら死期を早めようとしてゐるのだといふ江戸城中の噂も書き加へてあつた。しかし、まだ三十九歲の壯齡で分別盛り、まさか自ら死を求めるやうなことはあるまい、と齊彬は思つてゐた。だが、松平慶永の心配が、今は事實となつて現れた。
齊彬にとつては、實に長い間の盟友である。ある意味では良き弟子であり、彼と幕閣とを結び、また水戸齊昭とを結ぶ楔子であつた。齊彬の襲封を早めたのも阿部、「高崎崩れ」を穩便に取扱つたのも彼、琉球密貿易を默許したのも彼、大船製造の禁を解いたのも彼、篤姫入輿に盡力したのも彼、また此度の一橋慶喜擁立に就いて幕閣唯一の味方も彼。——その阿部正弘の逝去の報せである。齊彬が鞭を取り落したのは無理はなかつた。
落ちた鞭を堅山武兵衞が慌てゝ拾ひあげて、齊彬に渡す。齊彬はその鞭をあげて軍賦總奉行の島津久徵をさしまねいた。
「余に代つて少年隊を監督せよ。この部隊は特に嚴重に訓練の必要がある。門閥の子弟の柔弱と怠惰を絕對に許してはならぬぞ。」

＊

午後三時になると、下加治屋町にも調練の太鼓が鳴りひびく。叩き手は方限取締の大久保市藏である。市藏が役所に出てゐるときには、親父の次右衞門が代つて叩く。
「小兵衞、小兵衞！」生垣の向うから甲高い子供の聲が呼

びかけた。「駄目だぞ、遅れちゃあ。愼吾はゐないのか。」
裏座敷で水戸の同志に宛てた手紙を書いてゐた吉之助が顏をあげると、白鉢卷に木銃をかついだ從弟の大山巖であつた。
「小兵衞はもう出かけたぞ。」
「へえ、珍しく早いなあ。……愼吾君もか。」
「愼吾は御殿だ。」
「あゝさうか。」
大山巖の兄彥八の邸は、同じ貧乏士族ながら、いくらか庭が廣い。鄕中仲間の角力の土俵もその庭につくつてあり、今度の調練の集合所もこゝに決められた。弟の巖はそれが得意でならず、毎日太鼓の音を聞かない先に、木銃をかついで下加治屋町中を駈けまはる。召集掛りのつもりなのだ。
東鄕平八郎兄弟、木藤市助、鈴木昌之助、黑木爲禎、伊知地弘一、西鄕小兵衞、みな大山巖に召集される組だ。小兵衞の兄の愼吾、卽ち茶坊主龍庵も、御殿が非番の時には坊主頭に鉢卷して飛んで出る。
「吉小父さんは來ないのか。」
「今日は駄目だ。手紙を書いてゐる。」
「さうか、濟んだら來てくれよ。調練のあとで、江戸の話のつゞきを、みんな聞きたがつてゐるからな。」
十六歲の大山巖は、ませた口調で言ひ、丸く太つた顏の汗をつるりと平手で拭いて、番所小路の方に飛んで行つた。
もともと子供の好きな吉之助である。少年隊の調練には暇のあるかぎり出かけて行き、時には自分で號令もかけ、調練が終つた後には、ベルリやハリスの話から始めて、江戸土產の新知識を少年の頭に吹きこむ。
眼を輝かせて聞き入る少年たちの姿を眺めるのも樂しいが、歸國以來、あらゆる反對を押切つて軍備の充實に熱中してゐる齊彬の眞の胸中を知るものは、自分ひとりだとひそかに自惚れるその氣持も樂しい。
少年團の調練は今度の歸國によつて初めて開始されたものだが、大人の調練はずつと以前から行はれてゐた。嘉永四年の襲封直後、齊彬が何より先に着手したのは軍制改革である。西洋兵式による兵隊調練、砲隊調練、馬隊調練、——天保山の調練場は軍鼓の響と銃砲聲にとざされたかたちであつた。
嘉永五年二月の吉野ヶ原の猪狩に託した軍事調練には、實に一萬四千の人數が集つた。同年八月、天保山並びに二の丸外御庭に於ける城下十二組の總檢閲は、フランス大隊訓練、「バタイロン」練操の嚆矢であつて、三百六十小隊、兵士一萬一千二百八十二人、旗手三十二人、大砲二十四門、砲手百六十八人の大部隊であつた。嘉永五年には騎兵隊の設置、安政三年には海軍創設令。

この大計畫、大軍備の目的とするところは何か？　それを知るものは現在のところ自分だけだと思ふと、吉之助はじつとしてをることができず、太鼓の音を聞くたびに、毎日のやうに調練場に駈けつけたのだ。

だが、今日はそれどころではなかつた。齊彬の雄圖を挫折せしめる大障害が江戸に於て起つた。即ち、阿部正弘の急逝である。

*

吉之助は筆を執つて、水所の同志原田兵助に宛てゝ書いた。

「福山侯御死去の由、なんとも力なき次第、天下國家のため悲涙此の事に御座候。この時に乘じ、弊國の奸物の勢ひを得候儀にて、なほさら恨むべく嘆ずべきことども、御苦察下さるべく候。」

阿部正弘の死は薩摩藩に思ひがけない影響を及ぼした。この機に乘じて藩内の舊守派が擡頭しさうな氣配がある。

碇山將曹は既に病死したが、老公齊興、お由良、久光を取卷いて、島津豐後、吉利仲の一派は依然として藩政の要職にある。だが、吉之助が奸物といふのは、必ずしもこの一派のみにとゞまらない。例へば國許家老の新納駿河や御側役堅山武兵衞などは、むしろ公平無私で硬骨な人物であるが、齊彬の革新政策を理解せず、朝廷よりも幕府を重しと視、藩内の尊皇革新派を何かにつけて彈壓しようとする點で、この一派もまた吉之助にとつては明らかな奸物なのである。

島津下總、喜入攝津、蓑田傳兵衞、桂武久などの重臣連は、やゝ物解りがよく、島津豐後ほど奸惡でもなく、新納駿河ほど頑固ではないやうだが、お家大切の小心翼々、齊彬の新政策に必ずしも好意を示してゐない態度が吉之助には我慢できない。

これらの諸黨派が、阿部正弘の死を機會に一齊に乘出して來て、齊彬のまはりに固い垣根をつくつてしまつたやうに、吉之助には思はれた。

阿部正弘は幕閣に於ける齊彬の唯一の味方であつた。むしろ、齊彬の意のまゝに動いた人物である。今までのところ、齊彬は阿部正弘を通じて幕府の權威を逆用して、お家第一幕府第一の因循姑息な重臣連を牽制して來た形である。その阿部が倒れたのだから、藩内の反齊彬派は一齊に頭を擡げるにちがひない。まだそのたしかな證據が現れたわけではないが、どうもそんな氣がしてならなかつた。

御庭先に出仕して、齊彬にそのことを言上したが、齊彬はたゞ笑つてゐた。

「つまらぬ心配をする奴だな。お前といふ奴は、いつも戰ふ相手をつくつておかないと氣のすまない男だ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「私の考へすぎでございませうか？」
「余は家臣とは戰はぬ。……お前ももつと大きな敵を見つけるがよい。」
さう言はれると一言もなかつたが、しかし、自分の推察もあやまつてゐるとは思へない。
歸つて大久保市藏に話すと、市藏も同感だと言つた。
「殿樣は國許の情勢を充分には御存じないのかもしれぬ。藩内に敵がないなどとおつしやるのは少し樂觀にすぎるやうだ。」
「俺もさう思ふ。歸つて來てまだやつと三月だが、俺にはよく解る。殿樣の政策を心から支持してゐるものは、若い同志たちだけだ。他の連中は、口實さへつけば、いつでも殿樣の新政策をひつくりかへさうと狙つてゐる奴らばかりだ。」
「その通り。」市藏は答へた。「で、どうすればいゝと思ふか。」
「勿論、同志の結束の他に對策はない。お前は藩内をまとめろ。俺は江戸の同志と藩外の同志をまとめる。」
相談の上で、吉之助は江戸の藩邸の仲間に激勵文を書き水戸や越前の同志にも、それとなく應援をたのんだ。その中の一通が今の手紙である。

＊

手紙を書き終つた吉之助は、日の暮れるのを待つて、小路をへだてた筋向ひにある川畑魯水の邸に出かけた。
魯水は殿中の奥侍醫で、齊彬の話し相手である。吉之助のうかゞひ知らぬ殿中の祕事も、この人を通ずれば聞き出すことができる。齊彬もまた吉之助への傳言を、ときどき魯水に託することがある。
魯水は庭のへちま棚の下で行水をつかつてゐるところであつた。
「やあ、また來たな。今日は何もないぞ、俺のところに來れば、いつでも餌にありつけると思つてゐたら、蟲がよすぎるぞ、はつはつは。」とピシヤリと坊主頭の藪蚊を叩き、「まあ上つて待つてをれ。胡瓜もみくらゐなら、そのうちに出るかもしれぬ。」
吉之助は縁側に腰をおろして、魯水の裸體を眺めながら、「大きな腹ですなあ。」
「お世辭のつもりか。不器用な奴ぢや。布袋樣ぢやあるまいし、並みの人間で腹だけ大きかつたら腸滿ぢや、自慢にはならぬ。」
「女だつたら、身持ですな、自慢になるでせう。」
「それがお前の洒落か。ますます不器用な奴ぢや。」
「お須磨樣はまだでせうか？」
「えゝなに……なんだつて？」
「公子の御誕生はまだでせうか？」

「はつはつは、それが聞きたかつたのか。公子と來たね、ますます不器用な奴ぢや。」
「なぜです？」
「なぜですとはなぜだ。いかに川畑魯水、耆婆扁鵲をしのぐ薩南の名醫たりとはいへ、生れぬ先に男か女か解つてたまるか。」
「あゝ、なるほど。」
「なるほどか。ますますあきれた不器用な奴ぢや。……痛い！　なんで俺の坊主頭ばかり狙つて刺すのだ、不器用な藪蚊め！」
　吉之助は縁側の蚊遣りを行水盥のそばに選びながら、
「では、御誕生はいつ頃でせう。」
「いやありがたう。ついでに脊中を流してもらひたいな。御誕生なら、九月の始めだ。」
「間違ひありませんか。」
「女の生み月も解らないやうだつたら、明日から御典醫は辭職だ。但し、公子か公女か、それは知らぬぞ。」
「川畑さん、魯水先生。」　垣根の外から呼びかけたものがあつた。「おや、西郷もゐるな。」
「あゝ、關先生！」
　關勇助であつた。學者風の肩衣に絽の袴をつけ、供の仲間をつれてゐるのを見れば、正式の訪問らしい。
「おつと、おつと。」　魯水は盥の中で大袈裟に慌てゝみせて、「玄宗皇帝ぢやあるまいし、衣冠束帶で虞美人沐浴を眺められちやあ、こりやたまらん。……おい、西郷止水先生、早く關廣國先生を座敷に御案内して、しばらく御相手を頼むよ。」
　川畑魯水が着物を着かへる間、吉之助は奥座敷で關勇助と話した。
「今晩は何か特別な御用事ですか。」
「いやいや、魯水先生にも會ひたかつたが、お前にも會ひたくてやつて來たのだ。……なんとも形勢が不穩になつて來たからな。お前や大久保の意見を聞いて見んことには、俺にも對策が立たん。」
「大久保を呼んでまゐりませうか。」
「いや、供の者に呼びに行かせた。今に來るだらう。……しかし、困つたことになつたものだ。これからといふ時に大切な人に死なれた。生きてゐる間には、それほどにも思はなかつたが、阿部伊勢守といふのは、やはり當代に缺くべからざる人物だつたのだな。」
　關勇助は白髮の眼立つ首を振つて、打水に濕つた庭先を眺める。殘暑の季節であるが、夕闇が深くなると、萩の葉をゆる微風に立ちそめた秋の氣配が感ぜられる。

「今晩は、……お使ひをいたゞいて恐縮です。あ、西郷もゐたのか。」
庭先をまはつて、大久保市藏が入つて來た。
「おつと、おつと、これは千客萬來ぢや。」魯水も廊下づたひに姿を現して、「これがみな患者なら、魯水先生御內福といふことになるのだが、打ち見たところ、毒を盛られても死にさうにない御連中ばかりぢや。」
「關先生、何の御用事でせうか。」
座もきまらぬ先に大久保市藏は氣せはしく問ひかける。
「少々機密に屬する問題だが……」關勇助は膝を正して、「魯水先生の御意見もぜひ伺ひたいと思つてをります。」
「いや、かしこまりました。いづれ、左樣なことだらうと既に覺悟はいたしてをります。」
口ではふざけながら魯水も眞顏になる。
「先づ、西郷の意見から聞きたい。江戸の情勢だが、阿部伊勢守亡き後の幕閣はどんな風に動いて行くとお前は思ふか。」
吉之助はしばらく考へてゐたが、
「申すまでもなく、我藩にとつては極めて不利な動きを示すでせうが、先づ起ることは水戸と幕府との正面衝突ではないかと思はれます。」
「ほう、水戸と幕府。」
「事の表面だけに就いて見ましても、老中首座の堀田備中守は開國派で水戸老公は攘夷派の本尊です。かねてから仲が悪い。老公は備中守を蘭癖先生と仇名して毛嫌ひするし、備中守は內心老公の頑迷ぶりを輕蔑してゐるにちがひありません。その他の老中、牧野備前守、久世大和守、內藤紀伊守などに到つては公然たる反水戸派です。これらが大奧の勢力と結んで反對工作を開始したならば、いやでも水戸は幕閣と正面衝突です。」
「そこまでは俺にも想像がつく。」
關勇助は憂はしげにうなづく。市藏は眼を光らせて吉之助の口元を見つめてゐる。魯水の顏からもとぼけた表情が消えて、醫者ながら、齊彬の祕密な相談役だと噂されてゐる。その鋭い表情が眉の間に現れた。
「その次には越前が幕閣と衝突します。松平慶永公は水戸老公の弟子だと思はれ、口の惡い連中は、老公の傀儡だとさへ言つてゐます。その點はかねがね、わが藩公も心配されてゐたことですが。……しかし、幕閣對水戸越前の衝突は、これは表面の現象で、それよりももつと困つたことが近い將來に必ず起ると、私は想像してをります。」
さう言つて、吉之助は一座の顏を見まはした。

*

「鋒先が我が薩摩に向けられるといふ意味か。卽ち幕府と

薩摩との衝突……」

大久保市藏がせきこんだ口調で訊ねる。

「それも考へられる。」吉之助は市藏の顏を見かへしながら答へた。「しかし、我が藩公は水戸の老公とはちがふ。幕府の老中や奉行連に揚げ足をとられるやうなことはなされてゐまい。特別な事情が起らないかぎり幕府も隙を見出すことはできまい。また我が藩をまで敵にまはす實力と決斷を堀田や久世が持ち合せてゐるとは思へぬ。」

「ふうん。」

「我が藩との衝突が起るより前に京都との衝突が起るかもしれぬ。いや、必ず起ると僕は思ふ。もしも、この衝突が起つた場合には、我が藩はいやでも渦卷の中に卷きこまれてしまふ。」

關勇助は腕組みをしたまゝ、大きくうなづいた。市藏も天井を睨んで默りこむ。

魯水はくぼんだ瞳の奥をキラリと光らせて、

「なかなか、うがつたことを言ふぞ。理由が聞きたいな。どうして江戸と京都が衝突するのか、なぜ薩摩がその渦の中に卷きこまれなければならぬのか？」

「阿部伊勢守は政局の裂け目をつなぐ楔子のやうな人物でした。……人眼には立たなかつたが、坐るべき場所にちやんと坐つて、幕府と水戸をつなぎ、水戸と薩摩をつなぎ、江戸と京都をつないでゐたのです。……その楔子がぽろりと落ちた。裂け目は見る見る大きくなつて、何もかもばらばらです。水戸も、大奥も、京都も、それぞれ勝手な方向に動きはじめます。現に動きはじめてゐます。水戸は勝手に京都と連絡し、幕閣は京都所司代や九條關白を通じて、その逆の手を打つ。大奥の女中達は結束して、水戸越前の慶喜擁立運動に反對する。……堀田正睦には、とてもこのばらばら狀態を收拾する力はない。他の老中連に到つては裂け目の中に石をはふりこんで、ますます龜裂を大きくすることよりほかに藝はないでせう。魯水先生のお言葉を拜借すれば、どいつもこいつも飛んだ不器用者ぞろひ……」

「ふうん、なかなか器用なことを言ひをる。それで？……」

「それで、江戸と京都が衝突すれば、薩摩はどちらの側に立つでせうか。魯水先生の御意見を伺ひたいものです。」

吉之助はおちついた口調で、逆に突きこむ。

「不器用な質問をする奴ぢや。そのやうな重大事が卽座に答へられてたまるものか。」

と魯水は巧に逃げたが、吉之助の自信のこもつた言葉つきと際どい質問には內心おどろかされた樣子であつた。

「關先生はどうお考へです？」

吉之助は勇助の方をふりかへる。

「もつと考へさせてもらはう。」

「大久保、君はどう思ふ？」
「殿の御胸中は拜察の限りではない。」
と、市藏はまた天井の方に眼をそらした。吉之助は大きな眼で二人の顏をかはるがはる睨みつけながら、
「なぜそんな曖昧な返事をするのです。殿の御胸中に問ふまでもない。自分の胸に訊ねたらいゝのです。……殿樣は必ず京都の側にお立ちになります。我々も喜んでそれに從ふ。たゞ、それだけぢやありませんか。」

＊

萩の葉をわたる風が白い。秋である。
齊彬は居間の緣側に毛氈を敷き侍臣の石川確太郎を相手に、小さな黑い小箱を組立てゝゐる。
「レンズ、レンズ……英語ではレンズと言ふのか。……ここにはめこめば、……なるほど、ぴたりと合つた。」
「その次はシヤツタア……閉寒器と譯しませうか。」石川は英語の說明書を手にして首をひねりながら「この小さな蓋のやうなものでございます。」
「シヤツタア、閉寒器か。……遮光器、いや用途の上から言へば、むしろ開閉器と譯したらどんなものだらう。」
寫眞器の組立てであつた。
石川確太郎は先には英國海軍制度の取調べを命ぜられ、今は集成館掛の一人である。集成館は磯の別邸の中にある反射爐、鑛開臺、その他樣々な製作工場を合併して新に名づけられたもので、
鋼鐵の製造
大小銃砲の鑄造
火藥及び綿火藥
陶磁器、紅硝子
製紙、紡績、製油、洋式朱粉
甘藷アルコール、硫酸、硝酸、鹽酸
金屬分析、鍍金術
軍用パン、軍用スープの研究
をはじめ、軍事、殖產、貿易上の必要品を產出するための工場、試驗所、實驗室を集大成した新施設である。從業の職工人夫の數は時に千二百人に及び、齊彬が江戸でひそかに模寫したペルリのライフル銃三千挺も、こゝで製造中である。
火藥と綿火藥の製造は既に嘉永年間に成功してゐる。石川確太郎に命じて蘭書の硝石製造法を飜譯せしめ、それに基づいて谷山鄕に大硝石工場を建設、更に薩摩特產の芋燒酎より純良なアルコールの抽出を行つて、大量の火藥及び雷粉を製出することができた。薩摩火藥の效力は舶來品をしのぐと言はれ、その貯藏高も既に數萬斤に及んでゐると噂されてゐる。

紡績機械は英國より輸入し、城西の武村及び水吉村に幅廣織機の工場があり、動力に水車を用ひてゐるので、工場は『水車館』と呼ばれてゐる。

電氣と瓦斯の研究も、實驗的には殆ど完成の域に達してゐる。白鶴城内の本丸と二の丸の間には、電線が張られ、電信機が通じてゐる。山ヶ野金山、谷山錫鑛山では電氣による鑛石爆破が試驗されつゝある。送電爆破により地雷及び水雷の研究が豫定表の中に加へられた。夜になると奥庭の石燈籠が幽靈火のやうな蒼白い灯影にかゞやく。瓦斯燈の實驗であつた。

陶磁器と硝子器の製作も決して單なる道樂ではない。海外貿易が早晩開始されるといふ見通しをつけ歐米人の嗜好を考慮に入れて、薩摩燒、薩摩硝子の生産を企てたのである。後にドイツ製品と肩をならべ世界の市場に名を馳せた薩摩紅硝子も集成館から生れた。

齊彬の飽くなき泰西文化吸收熱はつひに寫眞術にまで及んだ樣子である。組み上つた寫眞器で彼は何を寫すつもりか。

廊下傳ひに、奥醫者川畑魯水の姿が現れた。摺足で近づいて來て毛氈の端に兩手をつき、持ち前の道化た口調で、

「ほゝこれはまた切支丹バテレン魔法の小箱。……いえ、なに、よく存じあげてをります。ホト……ホトカラヒイでございませう。」

齊彬は寫眞器を靜かに片寄せながら、

「魯水、もう診察の時刻か。」

「はい、そのお時刻でござります。」

「病氣の巢のやうな主人を持つては、侍醫もいそがしいな。」

「巢といふほどでもございますまい。」

「巢でなければ藪か。」

「これはまたお口が悪い、藪なら私の方でございませう、はつはつは。」

齊彬は寫眞器の方をちよつと心殘りげに振りかへつて、

「では、確太郎、組立ての殘りはまた明日としよう。跡かたづけを頼むぞ。」

魯水を從へて居間にかへる。居間につゞく小部屋は、漢法蘭法兩式の醫療器具と藥品類が一通り揃へられて、そのまゝ小さな病院になつてゐた。こゝには侍醫のほかには入れないことになつてゐる。

西洋風のテーブルをはさんで椅子に坐り、

「どんな樣子だ。」

齊彬の方が先に口を切つた。

「相當なものでございます。輕々しく診斷を下せる症狀で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.